論 文 内 容 の 要 旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人文学プログラム
２０１４年度入学
（氏名）　神　谷　光　信（かみや みつのぶ）

１．論文題目

ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究：村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた、異文化受容と対決の諸相

２．論文要旨

本研究は、これまで主にキリスト教作家という独自性に焦点を当てて研究されてきた遠藤周作を、ポストコロニアル的視座から再文脈化し、再解釈しようとするものである。換言すれば、それは遠藤研究の暗黙の前提そのものを問い直し、慣れ親しんだ思考の枠組みから意識的に距離をとり、遠藤の文学世界に新しい照明を投げかける試みである。

フランス留学から帰国した遠藤が小説家として再出発したとき、留学前に書かれた評論「神々と神と」（１９４７年）で示された比較文化論的主題に加えて、近代西洋植民地主義に組み込まれた有色人差別が大きな主題であったことを、「アフリカの體臭」（１９５４年）や「アデンまで」（１９５４年）の考察を通して明らかにした。そこでは弾劾されるものとして、有色人に対する白人の優越意識が描き出されていた。軍事力で日本を降伏させた西洋人の絶対的優位は、当時は否定し難い「事実」として存在していた。白人男性医師でキリスト教徒のシュヴァイツァーが日本でも賞讃されていた。シュヴァイツァーは、劣等な有色人を救済する崇高な西洋人を象徴する人物だった。そのような時代であったがゆえに、「アデンまで」の日本人男性主人公はフランス人女性との恋愛に挫折するしかないし、「月光のドミナ」（１９５７年）において、白人女性は日本人男性の手が届かぬ神々しい美の化身として表象されていたのである。

ところが１９６０年代に入り、東京オリンピックに象徴される目覚ましい経済成長を日本が遂げ、敗戦の衝撃から日本人が自信を回復し始めると、遠藤の作品のなかで、徐々に白人はその圧倒的な優位性を喪失していく。「変な外人たち」（１９６６年）では、西洋はすでに過去の栄光を誇る老残の白人男性の姿をとって描かれ、美しい中年白人女性は崇敬の対象ではなく、共感すべき対等な

存在として描かれる。さらに１９７０年代になると、物質的に豊かな生活を享受するようになった日本人は、白人世界に対して尊大になっていく。「ワルシャワの日本人」（１９７８年）で描かれたように、慎ましい生活を余儀なくされている共産圏の白人女性を、日本人男性は傲慢にも完全に見下している。

このように、西洋の白人世界に対する権力関係は徐々に変容していったのである。それは１９５０年代から７０年代にかけて書かれた「ポーラン・シリーズ」で、北アフリカ出身の黒人が、白人に対して卑屈から尊大に変貌していく過程が描かれていたことと表裏をなしている。かつて自分の出身国の方が、より近代化＝西洋化していると学生寮で誇示し合い、白人学生たちの「友情」を取り合おうとした黒人と日本人は、１９７０年代の東京で再会して、互いが到達した社会的地位を示しあう。

一方で遠藤は、「有色の帝国」（小熊英二）たる近代日本のコロニアルメンタリティが持つ暴力性や外国人差別についても、１９５０年代に「地なり」（１９５８年）や「夏の光」（１９５８年）などで描き出していた。日本による中国支配すなわち「五族協和」の美名の下の占領の実態を、「夏の光」は赤裸々に描き出している。これは『海と毒薬』（１９５８年）と同様、日本人の暗部を直視しようとする作品であり、遠藤が近代西洋植民地主義を、西洋だけの問題ではなく、近代日本の問題としても捉えていたことを証拠立てている。「夏の光」は、占領がもたらす人間性の歪みを描いた物語として捉えることができる。

シリアスな政治的主題を大衆小説で扱うという遠藤の戦略的方法は、これまで批評家や研究者たちに充分には認識されてこなかった。『一、二、三！』（１９６４年）と『どっこいショ』（１９６７年）は、ヴェトナム戦争の時代を背景に、アジア太平洋戦争の記憶と戦後日本の安全保障を主題とした問題作であった。前者では、皇室と帝国日本の東南アジア侵攻との結びつきが語られ、後者では「下請けの帝国」（酒井直樹）となった日本について、かつて徴兵忌避を企てた父親と防衛大学校進学を考える息子を描くことで問題提起した作品であった。戦争を経験した世代と、戦後生まれの世代が登場する点が共通している。１９６０年代は、日本は高度経済成長の時代であり、物質的な豊かさを日本人が実感し始めた時代である。戦争を知らない若い世代には、政治意識を先鋭化させる傾向もあり、戦争体験世代との認識の相違が浮き彫りにされてきた時期であった。

１９７０年代に入り、中東地域の植民国家イスラエルに遠藤が注目して『死海のほとり』（１９７３年）という問題作を書いた事実は注目すべきことであった。これは、近代西洋植民地主義に対する怒りをモチーフとして出発した遠藤が、現代の植民地主義に目を向けたという意味で、必然的な展開であったと考えることができる。第三次中東戦争後のエルサレムを舞台として描かれたこの作品では、イスラエルのパレスチナ占領が描かれている。ナチスによるユダヤ人差別が前景化されているが、「アラブのユダヤ人」（高橋和夫）たるパレスチ

ナ人へのイスラエルの抑圧が随所に描き込まれていた。「自衛のため」という名目で武装を許された入植者が支配する空間での、貧しいパレスチナ人たち。彼らはイエスの時代の貧しいパレスチナの人々と重ねあわされている。ここでは、西欧対非西洋という支配／被支配関係が、シオニズム国家とアラブ世界という構図に転位している。

『死海のほとり』が、中東国際政治に不案内な日本人読者に受け入れられなかったことは、遠藤を落胆させた。当時の日本人の多くにとって、アラブ世界は政治的にも文化的にも、アフリカ同様「遠隔地」であり、パレスチナ人という他者を想像することは困難だったのである。遠藤は歴史小説に方向転換するが、これは作家という職業上、多分に戦略的なものであったと捉えることができる。彼の問題意識は全てが地球規模となった現代にあったが、日本人の歴史好きを意識して、日本の歴史の中に国際化された現代を見出す方向へと向かったのである。『侍』（１９８０年）はそのような作品であり、１７世紀の日本と世界を舞台としながら、スペイン人に軍事的に占領されたインディオたちの同化と抵抗を通して、近代西洋植民地主義の実態を生々しく描き出している。それは１９７０年代半ばまで続いたポルトガルのアフリカ植民地支配を意識させるものであり、また、今日まで継続しているイスラエルのパレスチナ支配と重なり合うものであった。歴史小説を書くことで、植民地主義に苦しめられてきたラテンアメリカやアフリカ、パレスチナの人々を、尊厳ある人間として日本人が想像することができるような方法を選んだのである。

もう一つの戦略は、大衆小説でシリアスな主題を追求する方法である。『砂の城』（１９７６年）はそのような作品であった。ここではパレスチナ解放闘争が、島原の乱と結び付けて描かれており、「弱者」の絶望的な抵抗としてハイジャックが扱われている。

遠藤にも日本がアメリカ合衆国の準植民地状態に置かれているという認識があったことは、素人劇団「樹座」の演目『蝶々夫人』（１９８４年）での、政治的イロニーに満ちた演出からうかがえる。

死の三年前に上梓された長編『深い河』（１９９３年）は、英国の植民地支配から第二次世界大戦後に独立した南アジアの大国インドを舞台としている。１９８４年１０月が物語の現在である。ヒンズー教、イスラム教、シーク教などさまざまな宗教が共存する現代インドを舞台としたのは、カトリック教会の正統教義に長年違和感を抱いていた遠藤が、ジョン・ヒックの宗教多元主義に理論的な共感を当時抱いていたことと、おそらく無関係ではない。教会から異端児扱いされる日本人修道士を通して、キリスト教はこの作品のなかで相対化されている。

『死海のほとり』はイスラエルのパレスチナ占領という現在進行中の暴力を物語の背景としていたが、『深い河』は、インディラ・ガンディー首相暗殺という暴力をクライマックスに持ってきたことで、ポストコロニアル時代のあから

さまな暴力を、読者の眼前に突きつけている。首相暗殺はインドの国内事件ではあるが、小説中でこの事件が果たす衝撃は、宗教的対立の暴力性のみならず、１９４７年に独立を果たすまでの英国の長い植民地支配と抵抗の歴史や、独立を果たした後も続くインド国民の苦難の足取りを読者に強く想起させるものである。

このように、本研究で、日本のカトリック作家遠藤周作の文学が、１９５４年の「アフリカの體臭」から１９９３年の『深い河』まで、近代植民地主義とそこに組み込まれた暴力への関心に貫かれていたことを確認することができた。とりわけ、彼が提出した「同伴者イエス」像が、イスラエルに占領されたパレスチナの人々という背景のなかで、アウシュビッツの記憶とともに描き出されたことは、きわめて意義深いものがある。

遠藤は、「日本のグレアム・グリーン」と欧米で呼ばれてきた。しかし、グリーンは西洋で生まれた白人であり、遠藤はアジアで生まれた有色人であった。そこには、無視することのできない立場の違いが厳然と存在している。遠藤にあってグリーンにないのは、非西洋人の立場から西洋を相対化する視線である。それゆえ、遠藤をグリーンと安易に重ね合わせるべきではない。遠藤を「日本のグリーン」と呼ぶことは、要するに、彼を白人化し、西洋世界に取り込む巧妙な操作だったと見ることが可能であり、それは、問題提起力に満ちた彼の文学の根底にあった、作家自身の非白人性の自覚を見失わせてしまうものであったとも言いうるのである。

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Mitsunobu Kamiya

"A Study of Shūsaku Endō's Literary Works from a Post-Colonial Perspective: Aspects of Cross-Cultural Acceptance and Confrontation Clarified through Comparison with Takeshi Muramatsu and Kunio Tsuji"

The present study focuses on the works of Shūsaku Endō, which many critics have heretofore analyzed by viewing the author as a Christian writer and attempted to reinterpret his works from a post-colonial perspective. In other words, this study is an attempt to rethink the implicit premise underlying research on Endō, consciously distance itself from existing frameworks, and view Endō's literary works from a new perspective.

In addition to the themes of comparative cultural studies presented in his critique "Kamigami to Kami to" (The gods and God, 1947), which was written before his study abroad, discrimination against people of color as a facet of modern Western colonialism was again a major subject for Endō when he returned home from study in France and resumed the path of a novelist as exemplified in the works "Afurika no Taishū" (Body Odor of Africa, 1954) and "Aden made" (Up to Aden, 1954). In these works, the assumption of superiority held by white people toward people of color was depicted to denounce it. The total dominance of the West, having forced Japan into submission through military force, was hard to deny at this time. Even Albert Schweitzer, a white male doctor and a Christian, was praised in Japan. Schweitzer symbolized the notion of the noble Westerner coming to the aid of people of color deemed to be inferior. The era being what it was, the love of the male Japanese protagonist in "Aden made" toward a French woman is thwarted, and in "Gekkō no Domina" (Domina in Moonlight, 1957), white women are represented as being divine incarnations of beauty that were out of the reach of Japanese men.

However, in the 1960s, Japan achieved a remarkable level of economic growth that was symbolized by the Tokyo Olympic Games, and as Japanese people began to regain their confidence from the impact of defeat in WWII, in Endō's work white people also

begin to gradually lose their status of overwhelming superiority. In "Hen na Gaijintachi" (Strange Foreigners, 1966), the West is depicted as an elderly white man boasting of past glory, while beautiful middle-aged white women are portrayed not as objects of reverence but as equal human beings worthy of empathy. Moreover, in the 1970s, Japanese people enjoyed materially rich lives and had come to be arrogant toward the Western world. As depicted in "Warushawa no Nihonjin" (Japanese Visitors in Warsaw, 1978), Japanese men completely and arrogantly look down on white women who are obliged to live modest lives in communist countries.

This way, power relations with the white Western world gradually changed. In the "Paulin Series" written from the 1950s to the 1970s, the same process, from being submissive to becoming arrogant, is reflected by the changing attitude of a North African vis-a-vis white people. The two men – one African, one Japanese – who once boasted to each other in their dormitory that *his* country was more modernized and Westernized than the other, and competed in winning friendships with white students, meet again in Tokyo in the 1970s and this time, proudly demonstrate to one another the social statuses that each country has reached.

Conversely, in the 1950s, Endō depicted in works such as "Jinari" (Rumbling of the Ground, 1958) and "Natsu no Hikari" (Summer Light, 1958) the violence and discrimination toward foreigners held by the modern Japanese colonial mentality of a "colored empire" (Eiji Oguma). The actual state of the Japanese occupation of China in the name of the principle of "Gozoku kyōwa" (five races under one union), is frankly depicted in "Natsu no Hikari". This work, in a manner similar to that in *Umi to Dokuyaku* (The Sea and Poison, 1958), attempts to look directly at the dark side of Japanese history, and Endō demonstrates that modern Western colonialism is a problem not only in the West but also in modern Japan. "Natsu no Hikari" can be regarded as a story that depicts the distortion of human nature at the hands of foreign occupation.

Endō's strategy of dealing with serious political subjects in popular novels has not been adequately recognized by critics and researchers thus far. Written against the backdrop of the Vietnam War, *Ichi-ni-san!* (One, Two, Three! 1964) and *Dokkoisho* (Heave-ho, 1967) are controversial works that focus on memories of the Asia-Pacific War and Japan's postwar security. The former work discusses the connection between the imperial family and the Japanese Empire's invasion of Southeast Asia, while the latter work focuses on the issue of Japan's "Subsidiary Empire" (Naoki Sakai) by depicting the conflict between a son who wishes to enter National Defense Academy of Japan and his father who once plotted to avoid conscription. These two works have an aspect in common that features both the generation that experienced war and the generation that was born after WWII. The 1960s in Japan was an era of high economic growth and a time when Japanese people began to realize material wealth. It was a time that highlighted the generational difference between the younger generation, who

had no memory of the war and who had a tendency toward adopting radical political stances, and the older generation, who had experienced the war.

It is worth noting that in the 1970s, Endō wrote the controversial work *Shikai no Hotori* (Beside the Dead Sea, 1973) that focused on the Middle-Eastern colonial state of Israel. This can be thought of as an inevitable development in the sense that Endō, who originally employed motifs of anger toward modern Western colonialism, casts his eye on a case of contemporary colonialism. The work depicts Jerusalem after the Six-Day War and the Israeli occupation of Palestine. The discrimination faced by Jews at the hands of the Nazis also forms the foreground; however, the Israeli repression of the Palestinians as "Arab Jews" (Kazuo Takahashi) is implicit throughout the work. Poor Palestinians in areas dominated by settlers who have been armed in the name of "self-defense" are contrasted with the poor Palestinian people of Jesus' time. Here, the relationship of dominance/control that existed between the West and the non-West is shifted to the composition of the Zionist State and the Arab world.

The fact that *Shikai no Hotori* could not be accepted by Japanese readers who were unfamiliar with international politics in the Middle East disappointed Endō. For many Japanese readers at the time, the Arab world was politically and culturally "remote," as in the case of Africa, and it was difficult to imagine the Palestinian "other." Endō turned this into a historical novel; for a professional writer, this decision must be a strategic one. He had a modern awareness of issues in an age when everything took place on a global scale, and possibly considering the love of history that many Japanese people have, he went in the direction of finding internationalized modernity in the history of Japan. *Samurai* (The Samurai, 1980) is one such work, which, set in Japan and other areas around the world in the 17th century, vividly depicts the conditions of modern Western colonialism by observing the assimilation and resistance of Native Americans under Spanish military occupation. It is conscious of the Portuguese colonies in Africa, which lasted until the mid-1970s and coincides with the Israeli occupation of Palestine, which continues to date. Through framing the work as a historical novel, Endō selected a strategy that allowed Japanese people to imagine the people of Latin America, Africa, and Palestine who have suffered under colonialism as having their own kind of dignity.

Another strategy of his was to pursue serious subjects in popular novels. *Suna no Shiro* (Sand Castle, 1976) is one such work. Here the Palestinian liberation struggle is likened to the *Shimabara no Ran* (Shimabara Rebellion) of the 17th century, and hijacking is treated as a desperate act of resistance by the weak.

Endō was also aware of the fact that Japan was placed in a state of quasi-colonization by the United States of America as can be seen in the rendition of *Madama Butterfly* (1984), a production rich in political irony and performed by his amateur theatrical group, Kiza.

The novel *Fukai Kawa* (Deep River, 1993), which he wrote three years before his

death, is set in India, an independent South Asian power that emerged out of British dominance in the aftermath of WWII. The story is set in October 1984. The fact that the work, set in contemporary India, a country where diverse religions including Hinduism, Islam, and Sikhism coexist, is not unrelated to Endō's sympathies with John Hick's theory of the pluralism of religions, particularly given that Endō had long felt a sense of incongruity with respect to the orthodoxy of the Catholic Church. Christianity is relativized in this work through the lens of a Japanese monk who is treated as a heretic by the Church.

Shikai no Hotori uses the Israeli occupation of Palestine, a form of violence in progress, as the basis of its story; however, *Fukai Kawa* brings the assassination of Indian Prime Minister Indira Gandhi to the fore, depicting the outright violence of the post-colonial era. While the assassination of the Prime Minister was a domestic affair within India, the impact of the incident in the novel is not only the violence of religious confrontation but also the strong recalling of India's long history of, and resistance to, colonial rule under Britain until the country achieved its independence in 1947 and depicts the grief brought about by the Indian people's suffering even after achieving independence.

Thus, this study confirms that the works of Japanese Catholic author Shūsaku Endō from "Afurika no Taishū" in 1954 to *Fukai Kawa* in 1993 are deeply interested in modern colonialism and the violence entailed by it. Above all, it is extremely significant that the image of the "companion Jesus" that he provides is presented against the backdrop of both Israel's occupation of Palestine and memories of Auschwitz.

Endō has been called the "Japanese Graham Greene" in the West. However, Greene was a white person born in the West, whereas Endō was a colored person born in Asia. These are important differences in position that cannot be ignored. Endō's works contain a perspective that considers the West from the view of the non-West that is not seen in Greene's works. Thus, Endō should not be compared with Greene so readily. In short, calling Endō the "Japanese Graham Greene" is a manipulation that turns him into a white person and incorporates him into the Western world, while ignoring the author's own non-white identity, which lies at the heart of the abilities of his works to pose significant questions.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者

放送大学大学院 文化科学研究科 文化科学専攻
人文学プログラム
氏名　神谷　光信

論文題目

「ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究：村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた、異文化受容と対決の諸相」

審査委員氏名

・主査（放送大学教授　博士（学術））　　青山　昌文

・副査（放送大学教授　博士（文学））　　島内　裕子

・副査（放送大学教授　修士（文学））　　佐藤　良明

・副査（立教大学教授　文学博士）　　小野　正嗣

論文審査及び試験の結果

　神谷光信氏が提出した博士（学術）学位申請論文『ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究：村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた、異文化受容と対決の諸相』は、従来主として日本におけるキリスト教作家という点に焦点が当てられて研究されてきた遠藤周作を、ポストコロニアル的視座から考察することによって、今まで明らかにされることのほとんどなかった、遠藤周作の今日的な意義深い本質的一面を論証しようとする研究である。

本論文は、問題の所在を明らかにし、先行研究を検証し、研究の方法と構成を述べる「緒論」に続いて、以下の、全１０章の「本論」を持っている。

先ず、第１章「背景と前史　日本人のフランス留学――戦争・性差・人種・階級」において、第二次世界大戦下と戦後の日本人のフランス留学について、これまでほとんど語られることのなかった片岡美智などのフランス留学経験を詳しく考察した後に、遠藤周作と辻邦生のフランス留学経験の相当に大きな違いを論定し、初期の頃から既に、遠藤周作が、近代西洋の植民地主義に反発する姿勢をかなり明確に示していたことが明らかにされる。

第２章「文学観――『真実』の開示空間としての小説」では、これまでほとんど考察されることのなかった遠藤周作の小説についての認識、小説観を論じ、その特質を更に明らかにするために、辻邦生の小説理論についても論じている。遠藤周作も辻邦生も共に、文学とは、人間の真実を追究するものであって、近代主観主義的な自己表現ではなく、作者が生きている世界の本質を表現する世界表現である、という文学観をもっていることが、ここで明らかにされる。

第３章「アフリカ――黒人の表象」では、遠藤の小説第１作である『アフリカの體臭』と『アデンまで』を中心に、遠藤の小説家としての出発点にアフリカがあったことと、西洋植民地主義に対する遠藤の認識を考察し、また、遠藤文学において、時代を経るにつれて、黒人表象が次第に変容してゆくことの意味が明らかにされる。

第４章「ヨーロッパ――白人の表象」では、『月光のドミナ』『変な外人たち』『ワルシャワの日本人』等を採り上げて、遠藤の単純では無い異文化理解を考察し、ヨーロッパ社会の周縁存在であるロマ表象についても考察し、１９６０年代の東京で、白人女性が日本人男性の憧れの対象ではなくなっていったことの意味や、高度経済成長期の日本人男性が当時の東ヨーロッパに対して抱いていた傲慢な優越感についても考察している。

第５章「アジア――中国人・日本人・インド人の表象」では、『夏の光』『地なり』『深い河』を採り上げて、かつての、日本によって植民地にされた満州社会における日本人と中国人の権力関係を考察し、大杉栄殺害事件において見られた日本人の暴力性を考察し、インディラ・ガンディーとシーク教徒のそれぞれの描き方の問題点を考察している。

第６章「大日本帝国と『大東亜戦争』の記憶」では、『一，二，三』『どっこいショ』を採り上げて、アジア太平洋戦争において全ての日本人が被った苦しみの責任を皇族が負っているという認識を、虚構の形式の内に遠藤が持っていたことを考察し、冷戦期の東京を舞台に、国家、戦争、自衛隊などについて文学的探究を遠藤が試みていることが明らかにされる。また、遠藤の『鉛色の朝』と辻邦生の『影』を比較しながら、戦時中の忌まわしい過去に戦後になっても苦しみ続ける元日本人兵士を遠藤が描いていることを指摘している。

第７章「大日本帝国海軍と『蝶々夫人』の幻影」では、遠藤の兄正介の遠藤文学における存在について考察し、更に、遠藤が作った素人劇団樹座の演目『蝶々夫人』の演出が、アメリカの「下請けの帝国」となった戦後日本への政治的イロニーの表明でもあったことが明らかにされる。また、この問題意識をより鮮明に示すために、遠藤の親しい友人村松剛が戦後日本をアメリカの「保護領」国家として捉えていたことを指摘している。

第８章「ポストコロニアル時代の植民地主義」では、『死海のほとり』『砂の城』『侍』を採り上げて、脱植民地時代における植民国家イスラエルの描き方を分析して、遠藤の反植民地主義がそこにも伏流していることを指摘し、村松剛のイスラエル観との違いを明らかにしている。また、パレスティナ解放闘争を思わせるハイジャック事件を引き起こす青年を登場させることで、遠藤が、美しい生き方、善い生き方とは何なのかということを政治的にも深く問いかけていることを明らかにし、更に、遠藤の歴史小説に隠されている、現代の植民地主義への批判を明らかにしている。

第９章「キリスト教的階層秩序と近代西洋植民地主義――神・天使・人間・動物」では、遠藤のテクストに登場する犬の表象をコロニアル・コンテクストの下で分析することによって、遠藤の反植民地主義的立場を明らかにし、更に、『男と猿と』『彼の生き方』を採り上げて、神・天使・人間・動物というキリスト教的階層秩序に対する遠藤の対抗的認識を明らかにしている。また、『死海のほとり』を新約聖書学との関連から再読解して、「同伴者イエス」という独自のイエス像の構築に向かった遠藤の軌跡を明らかにしている。

第１０章「『帝国医療』との関わり」では、「帝国医療」という分析概念を手がかりに、『ジュルダン病院』『雑木林の病棟』を採り上げて、遠藤が、近代

西洋医療と植民地主義とキリスト教の歴史的結合を認識していることを明らかにし、また、遠藤が社会的実践活動に本格的に取り組んだ唯一の例である「心あたたかな医療」キャンペーンの出発点となった現代医療の諸問題が、近代西洋医学そのものの帝国主義的な一面と深く結びついており、遠藤文学が、近代西洋医療への批判を含んだものであることが明らかにされている。そして最後に、奇跡を行わない「無力なイエス」という遠藤のイエス像が、「密林の聖者」シュヴァイツァーの神々しいイメージがもっていた西洋中心主義的で帝国主義的な性格と極めて対照的なものであることが明らかにされている。

このように、神谷氏は、本論文において、従来の遠藤研究がほとんど採り上げることの無かった、いわゆる純文学ではない中間小説・大衆小説をも考察の対象とすることによって、また、従来の遠藤研究が採り上げてきた純文学作品に対しても、従来とは異なるポストコロニアル的視点からの考察を加えることによって、遠藤文学のもっている、非西洋中心主義的で、反植民地主義的な本質的一面を、明らかにしている。この点が、本論文の学問的貢献として、第一に挙げるべき優れた点である。

また、遠藤の非西洋中心主義的反植民地主義が、単に西洋を批判していわゆる日本回帰的な立場に立つものではなく、近代日本の帝国主義的性格をも批判するものであることが明らかにされている点も、本論文の大きな成果である。

本論文は、このように、西洋植民地主義の他者表象にひそむ権力の問題を重視するという、ポストコロニアル的な視点から遠藤文学を読み直そうとするものであり、神谷氏は、この読み直しを、遠藤周作の作品テクストの細部に注目し、同時に作品が産出された際の歴史的・政治的文脈を可能な限り考慮しながら行っている。遠藤がどのように西洋文化を受容し、対決したか、西洋と非西洋との関係をどのように作品の中で描いているかが、本論文において、ポストコロニアル的な視点から明らかにされているのである。

本審査委員会は、慎重審議の結果、神谷光信氏が提出した博士（学術）学位申請論文に当初記述されていた辻邦生批判等が、遠藤文学の長所と対比させるために過度に辻に対して批判的な記述を帯びていた点等や、村松剛に関する伝記的記述等の遠藤文学研究にとっては直接的と言うよりもは付随的な面をもっている記述等を、修正削除するならば、上記の学問的貢献や成果等を考慮して、神谷光信氏が提出した博士（学術）学位申請論文が、博士（学術）にふさわしいものであるとの結論を得た。最終的に、神谷氏によって提出された博士（学術）学位申請論文は、これらの本審査委員会による修正削除指摘を受けて修正削除されたものであり、上述の「緒論」と全１０章の「本論」は、修正削除後のものである。